

創刊の辞

誰に向かって書くのか——二つの紀要から——

国際教養学部 学部長 重 松 伸 司

紀要といえば今でも記憶に残る紀要論文があります。

そのひとつは、私が助手になって初めて配布された文学部紀要の論文です。紀要の文字は大きく、しかも大部でした。たまたま開いた箇所は「哲学系」の集で、私には全く専門外の西洋哲学、確かアウグスティヌスについての十数頁の論文であったと思います。内容そのものをここで改めて要約するのは困難ですが、ともかく平かなが多くしかも文章は平易で実にすらすらと読める、そのことに単純に驚きました。

それまで哲学といえば—少なくとも自分の経験に限っていえば—ハイデッガーだのサルトルだのマルクスだのと、どの訳を読んでもたいていは難解な語句、もって回った言い回し、「～的」の多用、センテンスの長さ、読むたびに理解が異なる内容、途中で放棄したくなる…、それでもわかったつもりになろうと四苦八苦した苦い印象しかありません。ともかく哲学は避けて通るに如かずでしたから、実に新鮮な驚きでした。そうか、哲学とはこんな風にも書ける、読ませることが出来るものか（もっとも、どこまで内容を深く理解できたかは、今でも疑問ですが）、ともかく極めて難しい内容を抵抗感を与えずに読ませる、そんな先生がいるのだ。山田晶という先生でした。同じ大学の同じ学部の先生らしい、しかし実はこの先生の研究も業績もほとんど知らなかった。この先生はいったいどのような先生なのかという問いに、当時の上司であった M 教授に「君はこの先生のこと、知らんの？」と一笑に付されたことを今でも思い出します（この山田晶先生は大・学者であることは後になってわかりました）。

専門とする分野かそれに近い研究領域なら誰がどのような研究をしているかは大体わかるものです。しかし、それまでほとんど知らない研究領域については同じ大学、同じ建物の同僚でもわからないものです。それが、たまたま手に取った

紀要の一論文から理解でき、新たな興味と知的関心が生まれることがある。そのことを紀要という論文集から会得しました。

もうひとつの紀要も、文学部紀要ではありますが他の大学のものです。

執筆者は数年前になくなった網野善彦氏です。この方とはたまたま十数年間同僚として、また尊敬すべき歴史研究の大先輩として接することができた先生です。

網野氏は、数年にわたって－手元に実物が無いので正確には何年間かは覚えていませんが－延々と中世文書のテキストクリティークを紀要に執筆しておられました。原史料を活字資料に直し、注解と解題を加え、原文の修訂を行うという、いわば「論文以前」の基礎作業、手の内を見せるお仕事でありました。ほとんどの読者が読みもしない（と勝手に私は思い込んでいたのですが）史料とその解釈を、いったいこの紀要に載せることにどれ程の意味があるのか、紀要本来の目的から外れているのではないか、と思ったものでした。しかし、そのことを網野氏に問いただすことはありませんでしたし、また紀要編集委員（会）にも問い合わせたことはありませんでした。後になって、『中世東寺と東寺領荘園』（東大出版会、1978年刊行）という大著をご本人からいただきました。膨大な史料の、詳細な考証の中から浮かび上がる日本中世社会の一端、いわゆる網野史学の世界でした。実は、この著書には数年間にわたって掲載されていた紀要論文が盛り込まれているのでした。名著の土台は数年の紀要論文だったのです。

ところで、紀要を精読する読者、研究者は少ないと思います。それはかなり専門に特化した内容であり、流通・配布範囲も限られているからです。どの大学のどの学部の紀要であってもたいがい共通します。紀要廃止論が現れるのもこうした現状があるからです。では紀要は不要なのだろうか。

紀要はその学部の顔であり看板だと私は思うのです。それぞれの教員・研究者は個人営業の店主ですが、その集合体の専門店街にはそれ独自の個性があるはず。掲載される論文のテーマ・内容・方法・領域は執筆者によって異なっても、その総体の紀要にはある種の特徴が浮かび上がってくると思います。紀要は

大学あるいは学部のひとつの見識を示すものであろうかと思うのです。そのためには持続する必要があると思います。

文学部から国際教養学部にかわり、したがって紀要も「文学部紀要」から「国際教養学部紀要」にかわりますが、それは名実ともにかわるのか、あるいは単なる名称変更に過ぎないのか。

国際教養学の定義を一律に規定することは難しいし、またすべきことでもないでしょう。しかし、寄稿される論文の中から、一つでも二つでもなるほどこれが国際教養学、これが紀要なのかと読者に納得させるものが出れば、紀要としての意味はあると思うのです。予算消化のためにのみ刊行し続ける、謝礼を払わないと誰も執筆しない（この紀要はそうではありませんが）、論集が出せないというのは本末転倒でしょう。紀要は、本来研究者の研究成果の自発的な報告ですから、寄稿する意思が明瞭に現れてくるべきだと思うのです。地道型あるいは問題提起型を問わず、今後も国際教養学部紀要が続くことを期待します。